

不登校傾向への対策

萩 昌子（大阪）

要旨

キーワード：

はじめに

登校拒否の中でも、小学校低学年の場合、登校を渋るが保護者が体力にまかせて強引に子どもを学校へ連れていくことができるか、あるいは、子どもの方から「お母さんが送ってくれたら学校へ行く」と言う子どもがいます。そして、こういった登校渋りの初期の対応のいかんによって、不登校状態に進んで行くか、登校するようになるかの違いがあるように思われます。

また、保護者が子どもを連れてくる場合、学校へ来たのだが子どもは母親と離れたがらないという問題が起こってきます。この問題は教師と保護者がともに居合わせる場で起こるので、先生方から対応方法を相談されることがよくあります。そこで、今回は、不登校の初期段階の対応の指針と相談例を報告したいと思います。

1. 保護者から離れようとしません。教室まで一緒に来たがるのですが…

先生方から相談されるのは、「無理に学校へこさせてはいけいではないのでしょうか」とか「教師が子どもを抱き止めているのに、お母さんが不安気でその場を立ち去らないので、子どももよけい親を呼び止めようとして泣くのがひどいように思うのですが…」というようなことがよくあります。

このような場合、筆者が提案していることはつぎのようなことです。

◎責任領域を明確にした上で、教師と保護者が協力関係を作る

子どもがいやがっても学校につれてくるとしたら、それは保護者の責任です。また、子どもと親との間で、「教室まで一緒に行つてあげるから学校へ行きましょう」という約束のもとで親子が登校しているのなら、それは親子間での約束ですから、担任が介入するのは避けるほうがいと筆者は考えます。

学校へ連れて来て子どもを先生に引き渡し、親は教室まではついてはいかないという方針を保護者が選択しているなら、保護者から子どもを託されたところから学校の責任になります。このように、保護者の方針とそれに応じて先生の責任分担の合意を保護者と先生の間で取りつける必

要があると考えます。

どのような登校援助ができるかは、子どもの性格や家庭の事情によって違ってきます。どの方法を選択するかは保護者が決めて、学校に協力を求めることとなります。どの方法にするかは保護者の責任で決めてもらう事です。

◎子どもに宣言・約束したことは実行する

子どもに宣言したこと、約束したことは実行するように保護者を応援しましょう。どの方法をとるにしろ、その方法に伴うマイナス面やこの方法でいいのだろうかという不安がないわけではありません。選択にはリスクが伴います。リスクがなければ、迷う程の問題とはならないはずですが。ある方法を選択したならそれにとまなうマイナスよりは、その方法によって得られると考えたもの（プラス面）に注目して、目下選択している方法を実行することが大切です。どんなに理想的な方法であっても実行できなければ意味がありません。だからこそ、方針決定の段階で、保護者が納得でき、現実に行き可能な方法を十分検討し選択する必要があります。

保護者は「教室まで一緒にいってあげます」と約束したのなら教室までついていくこと。「校門までしか送りません」と宣言したのなら校門で先生に子どもを委ねるということを実行してもらいます。

◎親子の領分に了解なしに踏み込まない

先生方からは次のような質問を受けることがあります。

「お母さんも毎日たいへんだし、子どもが友だちと遊んでいる間にお母さんに帰るように言ってあげたいんですがだめでしょうか？お母さんがいなくなればなくなったでやれそうに思うのですが…」とか、「子どもに、『お母さんもおうちで用事があるのだから、ひとりで登校できるようにならないといけないよ』と話すのですが、親のしんどさがわからないんでしょうか？」

子どもはお母さんに一緒にいてもらいたい。そして、親も子どもの頼みを聞き入れて学校へついてきている。これは親子間の合意です。そんな時、親を帰らせようとする先生、親の立場にたって子どもの行動を暗に非難する先生は子どもにとってどう見えるでしょう？

先生は子どもの味方でいてください。また、子どもの登校を援助している保護者の応援者でもいてください。保護者はがんばって子どもを学校に連れてきているのです。保護者にはその努力をねぎらうべきです。子どもが教室に居なければ、先生がどんなに楽しい授業をしても子どもは見聞きすることはできません。「お母さんについてきてもらえてよかったね」、「学校に来てくれて先生はうれしいよ」という見方をする方が、子どもや保護者を元気にするように思います。逆に、「こんなことをしてはよくないのでは…」と見ることは、保護者の不安をかき立てます。保護者の努力に応える意味でも、先生は子どもと仲良くなるのが先決です。子どもに「学校は楽しい」、「学校は安全だ」と感じてもらうことが大切だと考えます。

2. とにかく登校はするんですが、学校ではどうしたらいいでしょ？

親と学校に来たいという子どものなかには、学校では親から離れられない子どもと見えるのですが、家では親が買い物に誘ってもついて行かないとか、近所の友だちと遊ぶときには自分ひとりででも出かけるということをよく聞きます。ということは、母親と離れられないという親子関

係の問題を子どもが抱えているというよりは、学校という場面に限って親と一緒にないと困ると子どもが考えていると言えます。つまり、「学校ー子ども」間に問題が存在すると考えることができます。もちろん、親子関係が影響していることも確かですが、学校との関係において子どもは困難に直面しているわけです。

それでは、ちょっと視点を変えて、困難に直面する学校へ保護者をつれてくる必要性、つまり、連れてくるとどんなメリットがあるかを考えてみましょう。

◎親の効用：したくないことを安全に避ける？

親をつれてくる最も考えられる効用は、したくないこと自信ないことを安全に避けるということではないかと思われまます。先生に叱られてもすべきことをしないで済まそうとする子どももいます。けれども、相談のなかで親から聞く子ども像は「きちんとしないと気のすまない子」であったり「きちょうめんな性格」であることが多いようです。「しなくてはいけないがちゃんとやれるか自信がない。でも、しないでいると先生に叱られるのでは…」と、子どもが考えているとしたら、親をつれてくるには、したくないことを強制されず安全に避けるという効用があるとは思われません？

◎親の効用：わからないときに教えてくれる？

家と違って学校では学校の決まりごとがあります。しかも、先生だけではなくさまざまな性格のクラスメートとの関わりもあります。どうしていいかわからないこともあります。そんなとき、「それはいけない」と注意してくれたり「～しなさいよ」と自分を見守ってくれている親がいることは安心ですね。

先生はクラス全体をみているので、自分ひとりを見ていてくれるとは限りません。わからないことがあったり、配布物が足りなくても常に先生から気づいてくれるとは限りません。自分から申し出ないとわかってもらえない場面があつて当然です。保護者の中には、ついていくだけではなく、「お友だちにそんなことを言つてはいけない」とか、「早くノートを出して書きなさい」とか「そこはまちがっているよ」などと、子どもの行動に口出しする人がいます。まるで、担任以外に専属指導者がついていようなものです。自分に苦手な関わりをしてくるクラスメートがいても、親がそばにいれば乱暴から守られるという利点もあるかもしれません。

そこで問題になるのが、その子どもは学校でどんなことに困っているのか、親をつれてこなくても学校は大丈夫だと感じてもらうにはどうすればいいかということです。それが学校の責任、担任の仕事になります。

◎親がついていなくても、子どもに自分の力で学校生活をやれると感じてもらふ

保護者には学校場面での子どもの行動に干渉しないようにお願いします。親としては注意したくなるような行動を子どもがするかもしれませんが、もし、親を連れずに学校へ来ているとしたらやはりその行動をするかもしれません。子どもは子ども自身で行動しその結末を体験しながら学んで行きます。お母さんがついてきていても、学校での出来事については先生にお任せしてくださいと保護者に話しています。ですから、保護者が子どもを授業に参加させようとして、「お母さんのそばにいないで、自分の席につきなさい」と子どもを押し戻す必要はないと思います。授業に集中できない子どもを呼び戻す必要があるとすれば、それは教師の責任です。要するに、

保護者は子どもが助けを求めてきたら応じることはあっても、保護者が子どもの学校での行動に干渉することは控えてもらうことが必要です。そして、親がついていてもいなくても親を連れてくる効用が保たれるようにします。つまり、親を連れてこなくても先生との間で相談できるパイプを確かなものにし、親を連れてきている時と同じような学校生活が先生の援助だけでやれると感じてもらえるようにするのです。

3. 保護者にはどんなことに気をつけてもらうといいでしょう

保護者の仕事は大きく言うと次の二つの項目になると思います

- 登校援助について方針決定をする。手伝えることは快く引き受ける。
- 子どものやり方を認め、自信を育てる

具体的な方法は小学校1年生のMさんとCさんの相談を通じて説明したいと思います。登校を渋る子どものことで保護者が教育相談に来られ、担任の先生とも相談し連携した例です。学校と家庭の両方で方針を確認し、それぞれの責任領域でできることを着実に実行された結果、短期間に状況が改善されました。先生方が保護者の相談相手になっていただくときの参考になればと考え、次に面接経過を報告します。

事例 Mさん（小学校1年生 女子）

「学校をいやがって保護者と登校するが、別れるときに泣く。母親に教室にいてもらうようにした。自分で登校する日もあったが、だんだん離れにくくなる。最近は母親がついていても泣いている。幼稚園の登園時も泣いたので母親が送っていたそうです。保護者が相談を希望していますので」と学校から相談依頼が1学期末にありました。担任が見たところでは、自分で登校してきた日は友だちとも遊んで元気にしている。ただし、ひとりでする場面では不安なのか、「ひとりで本読みするのはいや」と担任に言いに来るということでした。

◎保護者との面接 1回目

保護者との相談を開始したのはX年8月上旬でした。

子どもが登校を渋ると保護者は子どもをなんとか登校させようと努力します。説得したり叱ったりなだめたりします。それでも子どもが登校しようとしないと、登校したくない子どもとなんとしても登校させたい親との間で感情的対立が生じます。この対立の余韻は家庭生活にも影響します。家庭でも子どもは親の言いなりにならないでおこうとし、親は親として子どもをコントロールしなければと考えるようになります。そして、お互いに相手を自分の言うとおりにさせようと主導権争いの状態に陥ります。Mさんとお母さんもこういう状態で1学期末を迎えたことがお母さんの話からわかりました。

夏休みに入ると学校へ行く行かないで親子がもめなくてもいいので、親子ともホッとできる期間です。Mさんのお母さんには、夏休みの期間を利用して子どもとの関係を改善し、子どもが学校生活を自分の力でやれそうだと自信をもてるような働きかけをしてもらおうと相談員は考えました。

そこで、お母さんに、夏休みに入ってからの生活で、子どもさんに対してイライラしたり腹が立ったことはありませんかと尋ねました。

お母さんは「子どもが朝から友人宅へ遊びに行きたがるのだが、朝のうちから遊びにいったら相手に迷惑になると思って早くから出かけないように言うのですが、子どもは気に入らなくて怒っています」「お友達と遊んでいる時、『〇〇ちゃんとは遊びたくないよね』なんて、言ってるのを聞くと、『いじわるなことを言わないで誰とでも仲よく遊びなさい!』と叱ってしまいます」というような例を話してくださいました。

○相談員の提案

親が子どもの行動の善し悪しを判断してコントロールするのではなく、子ども自身が体験から判断していく機会が子どもの成長には必要です。この例ですと、もし、遊びに誘いに行ったら先方が迷惑であれば、子どもさんは断られるでしょう。もし、子どもさんが遊びに行くことで、「あそこの親は子どもに注意をしないんだろうか」と思われるのではという心配があるのでしたら、前もって「もし、子どもがおじゃまして迷惑な時間帯でしたら、断ってください」とお願いしておくということもできます。

あるいは、ある時刻までよその家に遊びに行ってもいいというお母さんの方針を変えないのであれば、ふくれながらも実際には玄関に座り込んで約束の時間になるのを待ってくれた子どもさんに、「お母さんの言うことを聞いてくれてありがとう。時間になったから遊んでいらっしやいね」と快く送りだしてあげてはいかがですかと2つの方法を提案しました。

○相談員の意図

友だちづきあいは子どもの課題です。いじわるなことを言っているとどうなるかは子ども自身が体験しながら学んでいくことです。大人からみて「それはまずいんじゃないかな…」と思うことでも、子ども同士ではそういうことを繰り返しながら社会性を身につけていくのです。「そんなことを言うとお友だちに嫌われるよ」などと子どもを諭しがちですが、子ども同士はそのようなことを繰り返しながら自分で学んでいくところがあるのです。失敗する前に親や教師が「これはいけない。それはいい」と子どもに代わって判断していると、子どももそれを頼りにするようになってしまいがちです。そうすると、親や教師の指示のこない未経験な場面へは子どもひとりで出て行きにくくなってしまいます。

子ども自身が体験する場をうばわないこと、また、失敗しながらも子ども自身の判断でやっていく力を信頼することが、保護者のいない場面でも自分の力でやっていけるという自信を育てることにつながると考えます。

◎保護者との面接2回目

2回目の面接は8月の末、2学期からの登校について保護者の方針を確認する時期となりました。

○「遊びにでかける時間は子どもに任せました」

Mさんのお母さんは遊びに出かける時間は子どもさんに任せることにしたそうです。そうする

と、朝早くて先方に断られたこともあるし、誘いに行かずに家で弟と遊んでいたこともあるし、結局、子どもの判断に任せてもたいした問題は起きなかった。子どもとの感情的対立もなく過ごせたという報告がお母さんからありました。

○「登校にはつきあう覚悟をしています」

2学期からの登校に関しては、お母さんは「送っていくつもりでいます。子どもがいてほしいと言えば教室まで行こうと思っています」と言われました。父親は子どもに「学校へ行かなくてはいけない」と強く言い、母親が付き添うことで家事に支障が出るかもしれないことも了解しているとのこと。「子どもにも『お母さんが送って行ってあげるからね』と話しています」という母親の心づもりでした。

○相談員からの助言

「送ってくれたら行く」という言葉のとおり、登校するのはあくまでも子どもです。親は送っていくのであって、連れて行くものではありません。また、教室まで一緒についていく覚悟をしているのであれば、少しでも早く親がいなくてもいいようにしようと子どもの知らない間に勝手に帰ってしまったたりしないようにしましょう。もし、お母さんが子どもの学校につき合うのに時間的制限がある場合は、子どもにそのことを説明し、お母さんのつき合える時間に合わせて学校を早退するか子どもだけで学校に残るかは子どもの判断を聞くようにしてくださいと助言しました。

◎担任との話し合い 9月中旬

学校での様子について担任の先生と連絡をとりました。

○担任から見た子どもの様子

- 母親がいるので、授業中も疲れてくると母親にくっつきに行く。それを見ているとなまけているようにも見える。
- プールの時間、みんなと一緒に課題をするのはいやがるが、自由に泳ぐときは入れる。「日曜日の楽しかったことを発表しましょう」という時はみんなの前で話しをするのに、国語の授業では「本読みはいや。あてないで」と言いに来ます。「じゃあ、あてないわね」と約束していますが…。

○相談員の意見

「サボリだな、ちょっと勝手かな…」と思える行動ですが、どちらかという『きちょうめんな子』『字をきっちり書こうとし筆圧は自信なさそう』というMさんの場合には、ちょっとさぼれるというのもいいことかもしれません。学校というところは無理しなくても、自分のやり方でサボリながらやっていると感じてもらうことが当面の目標になると考えます。

○担任からの相談

Mさんは体育の授業をいやがります。クラスメートが運動場へ出て行ってもMさんは行こうとしません。担任が体育に出るように誘ってもお母さんにひつついて離れようとしません。保護者も、他の子が暑い中、運動場に出て行くのを見ると、自分の子どもだけ体育をしないのが勝手な行動に見えたり、誘ってくれる担任に対して申し訳なく感じられるのか、体育に出るようMさんを説得しようとします。担任は授業を始めなければならないので「後からでも来てね」と行ってその場を離れるのですが、その後も親子がもめています。「じゃあ、後から来てね」と担任が言って立ち去ると、保護者に子どもを運動場に連れ出す責任を感じさせてしまうように思うが、こんな時、どうすればいいかというのが担任の先生からの相談でした。

○相談員の提案

「親を連れてこないでも同じ状況を作り出せるように」と考えると、体育を見学するか参加するかについて先生と子どもの間で話し合える関係を作ることが大切です。

「Mさんに先生から『今日の体育はどうする？』とMさんの気持ちを確認してください。もし、Mさんが直接先生に返事できなくてもお母さんに向かって意志表示をすれば、Mさんの選択を認める先生の姿勢を伝えてください。保護者は伝達役だけをしてくださいればいいと思います。この段階で大切なことは、体育に参加するのであれ、見学するのであれ、子どもの選択が先生との間で合意できることです。『保護者がいなければ無理にでもMさんを体育に出せるのに…』と先生が思うようであれば、子どもは苦手なことを避けるためには親を連れてくる必要があると感じるでしょうから」と相談員の考えを先生に話しました。

◎保護者との面接 3回目

○「離れている時間が増えました」

9月の下旬、3回目の面接では次のような報告がお母さんからありました。

- 母親から離れている時間が増えてきた。給食当番の時も昼休みもクラスメートと仲よくやっている。
- わからないことがあると自分から先生に聞きに行くようになった。
- お友だちとふざけたりして遊んでいる。家での姿と変わりなく、のびのびしてきた。

○相談員からのおすすめ

楽しんで子どもさんの登校につき合しましょう。

◎保護者との面接 4回目

10月下旬となりました。

○保護者からの報告

- 早く帰れるようになった。3時間目から2時間目までと、親が教室にいる時間がだんだん短

くなる。今では1時間目の途中で「もう（帰って）いいよ」と言う。

- 親が帰ってからの様子では、苦手だった体育も参加しているし、授業中も手を挙げて発表したり、元気にやっている先生から聞いている。

◎保護者との面接最終回

12月の面接時には、お母さんは学校まで送って行くだけになっていました。

学校から帰ってからも元気に友だちと遊んでいるし、来年、弟が入学するのを「一緒に行こう」と楽しみにしていて、親が送っていくものそう長くは続かないように思いますということで、保護者との相談はこの回で終了しました。

事例 Cさん（小学校1年生 女子）

Cさんの場合は、『登校をいやがってもがんばってつれてきてください』と保護者に言ってきたんですが、2学期になって親と離れてから泣く時間が長びくようになりました。家に帰ってからも幼い妹に対していらいらをぶついたり夜泣きするようになったので、保護者もこれでいいのかと不安になってきている様子。登校してきても子どもが母親の手を引っ張って『帰ろう、帰ろう！』と泣きながら訴えます。お母さんが担任に『どうしましょう…』と言われるので、『今日は帰っていいですよ』と答えたりしています。担任としてもこれでいいのかと迷うようになってきました。Cさんは明るく友だちの世話ができるしっかりしたところのある子なんですけど…」と9月中旬に担任の先生が相談に来られました。

先生とは、登校させる保護者の責任と子どもを託された学校の責任という話をしました。その後、保護者と相談を開始したのはX年10月中旬でした。

◎保護者との面接 1回目

お母さんは、「無理に行かせるのもよくないかと思って、9月中ごろ、登校をいやがるときは休ませてみたこともあるが、Cさんは学校に行けないことにもイライラするようだし家では退屈するのか結局妹にあたることは変わらなかった。登校した日の方が帰ってきてから友だちと遊びに行けるので機嫌がよい。それで、やっぱり無理にでも登校させた方がよいと考えるようになった」と話されました。つまり、お母さんの方針はいやがっても連れていこうということです。教室までついていくことは考えておられませんでした。

登校したがる子どもを連れていくには、親子間で感情的対立にエスカレートしない工夫が必要となります。そこで、朝起きてから登校するまでの様子を尋ねました。

お母さんが言われるには、いやがらずに登校する日はすんなり起きて自分で服を着たりするのですが、いやがる日は起きてもぐずぐずして服を着るのも自分で着ようとせずに母親を呼んで着せてもらいたがったり、果ては歯磨きまで手伝わせたりするので困っているということでした。

○相談員からの提案

- 登校させる時は毅然と「学校へ行きましょう！」とだけ言うようにしてください。子どもがいやがっても登校させるという方針の場合、子どもとの感情的トラブルを避けることが大切

です。そのためには、子どもを登校するようになだめたり説教したりはしません。ただ、学校に行く時間になっても子どもが自分で行く様子がない場合、母親に連れられて行くことを選んだのだと理解して連れていくことです。子どもは行きたくないで怒ったり、親を困らせようとするかもしれませんが、お母さんも感情的になって子どもを叱る必要はないことを説明しました。

- できることはいやがらずにしてあげましょう。そのかわり、登校準備で子どもがお母さんに手伝ってもらいたがることは快くしてあげることが大切です。

Cさんが学校を休んだ日にもイライラしてお母さんを困らせるとか、朝の準備をお母さんに手伝ってもらいたがるなどの情報から、Cさんはお母さんを困らせるという方法でお母さんの注目や関心を引こうとしているのではないかと相談員は推測しました。

相談員の提案を聞いたお母さんは、「子どもが私をしつこく呼んで用事をさせるのを見て、父親が子どもに『そんなことくらい自分でしなさい』と叱ったりします。でも、私がいやがらずに気持ちよく手伝っていれば、きっと父親も子どもを叱ったりしないように思います」と言われました。「お父さんはお母さんが困っているように見えるからあなたを助けようとして子どもさんを叱るのかもしれませんがね。そうして、親を困らせることで注目や関心を引きだしているように見えます。妹さんをいじめることについても、仲よく遊ぶ時もあるということですから、妹さんと仲よく遊べている時の方に注目するようにしましょう。実行してみて、子どもさんの様子を次回教えてください」と提案して初回の面接を終えました。次回は3週間後です。

◎保護者との相談 2回目

- 「月曜日だけはいやがりますが、ほとんど自分で登校しています」

お母さんの報告では、その後、ほとんどお友だちと登校しているということです。大好きなおばあちゃんからも「学校へ行きなさいよ」と言われ、自分も約束したのでしかたなく行ってるような面もあるが、とにかく登校している。ただ、困るのが月曜日。「どうも朝礼が苦手みたいだ」とお母さんは言われました。お母さんが送り届けた後も泣いていて、先生方にお世話をかけたらしいと心配しておられました。

それ以外は、学校へ行った日は帰ってきてからもお友だちと遊びに出かけているので、妹と関わる時間もほとんどなく、結果的に妹をいじめるようなこともなくなったというお話でした。

○相談員からの提案

- 朝礼がいやなら朝礼の終わる頃に登校するか、朝礼が終わるまで学校内のどこかで待っておれるように先生にお願いするのがいいか、子どもさんと相談してみることを提案しました。

◎担任との話し合い 11月上旬

○学校での子どもの様子

- 朝礼がいやで泣くので保健室にいたことがある。泣いていても落ちついてくると、こちらの様子をチラチラとうかがうようになる。そこで、本人が気分転換できそうな話題をもちかけ

ると、機嫌が直る。泣きやむと、後はいつものように元気になる。

- 友だちとのやりとりもしっかりやれていて、学習のとりかかりも9月ごろに比べてよくなっている。

○担任と母親の連携

責任領域を明確にした上で保護者のやり方を応援するという方針に関して、次のようなエピソードを担当の先生から聞きました。

「お母さんがCさんを校門まで連れては来ましたが、Cさんは抵抗して車から降りようとしないうちがありました。お母さんはずいぶんがんばられたのですが、その日は子どものいやがりよりも強かったのです。Cさんと格闘しているお母さんを見ていると『手伝わないといけないかな…』という気にもなったんですが、そうすると子どもの敵になりそうだし、学校へ連れてくるのは保護者の責任ということでしたから手を出さずに見ていました。

お母さんは子どもを車から降ろすことを躊躇されました。『こんな様子では後で先生にご迷惑では…』とお母さんが私に気を使っておられるようだったので、『迷惑じゃないですよ。学校に入ってからのは私に任せてください。お母さん、ここまで来たんですからもうひとがんばりしたら』と言ったんです。お母さんは『わかりました!』と言って、はりきって子どもを車から降ろし、私に託して帰られたんです。お母さんが学校に気がねするとおっしゃったので、そんなことは心配なくていいですよと私が言った時、お母さんの表情がパッと明るくなったのが印象的でした。」

◎保護者との面接 最終回

○「自分で登校しています」

朝礼のことを子どもに相談してみたが、子どもは朝礼もいやだが、だからといって自分だけみんなと別の行動をするのもいやだと言い、結論はでないままだった。ところが、その後は月曜日もいやがることもなく登校している。

そのほかで変わったことは、夜泣きがなくなったこと、学校の話をしてくれるようになったこと。以前はあまり話してくれなかったが、最近では、自分がしたことも含めて学校でのできごとを話すようになった。以前と比べると、親子が仲よくなれたように思う。

以上の話をお母さんから聞き、11月末、相談を終了しました。

おわりに

登校しにくい子どもの場合、自分で登校してきた日の様子を見ると、友だちと遊んでいるし、担任の先生にも自分から話しかけてくるなど、あまり学校生活に困っているようには見えないことがあります。今回、例にあげたMさんやCさんはそうでした。そのため、保護者が登校援助をすることで比較的短期間に状況が改善しています。反対に、なんとか登校しているけれど、友だちと遊べずいたり先生と話すのも苦手で学校では緊張している様子の子どものみもいます。このような子どもの場合には、学校へ親を連れてこなくても自分でやっていると子ども自身を感じるにはある程度時間が必要となりますが、保護者の責任と学校の責任領域の合意、子どもの意見を

聞きながら援助する関係など、対応の基本は変わりないと筆者は考えます。

また、MさんやCさんの保護者がとられたような方法を選択するには、まず第一にこれだけの労力を払っても子どもを学校へ行かさねばという価値観と、第二に体力、第三に時間という3つの条件が必要です。ですから、子どもをなんとしても登校させるという方針をすべての保護者が選択するとはかぎりません。保護者が子どもを学校に送り届けるという方法を選択しない場合の対応の留意点や相談例については別の機会に報告したいと思います。

更新履歴

2012年9月6日 アドレリアン掲載号より転載